【78】

氏　名（本籍）	永橋禎子（千葉県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　5229　号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**明治文学と自然** －正岡子規を中心に－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	新保邦寛
副　査	筑波大学教授	博士（人文科学）	清登典子
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	松本　肇
副　査	筑波大学准教授	博士（学術）	秋山佳奈子
副　査	筑波大学准教授	博士（文学）	谷口孝介

論文の内容の要旨

本論文は、正岡子規の〈俳句革新〉に同時代の自然科学や哲学が与えた影響を、主に自然をめぐる諸問題に沿いつつ解明し、それをもって子規の文業を近代文学史上に正統に位置付けることを目論むものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

序章
第Ⅰ部　景物・nature・自然
第一章　蝶へのまなざし－その多様性と明治中期の美学思潮
第二章　キリギリス・コオロギ観の変化－本草・生物学との関わりを視座に
第三章　季節に対する意識の変質－季節をめぐる明治中期の言説と混乱
第Ⅱ部　受容基盤としての哲学と儒学
第一章　子規の俳句革新運動と哲学 -「寒山落木」編集に見られる哲学的営為
第二章　〈美の標準〉論の方法－ハルトマン哲学の演繹的理想と子規の帰納的標準
第三章　〈感〉〈感情〉の論理－東西思想の統合
結章

序章では、近代文学の自然観をめぐる諸問題を概観しつつ、従来の研究が西欧文芸思潮史を準拠枠にするため、それに馴染まぬ正岡子規の文業を不当に無視してきた事態を引き出している。その上でそうした偏向は、子規文学を支える自然認識と同時代の自然科学や哲学の関係を解明することで是正可能であると主張している。

本論文は二部構成で、第Ⅰ部においては、子規の〈俳句革新〉が担わねばならなかった困難がいかなるものであって、それをどう解決していったかを、季語や季節区分の問題を通して論じている。第一章では子規が好んだ〈蝶〉の句を取り上げ、観察に基くそのものを描く〈写生句〉を志しつつ、一方で、伝統的な主題を描く〈景物句〉も捨てようとしない点に注目していく。そしてそれは、日清戦後の主に美学の言説が東西文化の差異を否定し、両者の本質に変りはないと主張した事態を受け、〈景物句〉の革新をも試みようとし

たからに他ならないとする。続く第二章では、伝統的〈景物句〉がそのものに関心を持たなかったことから生じた〈コオロギ〉と〈キリギリス〉の混乱に注目している。明治以降、旧派も新派も共にこの混乱を正そうとしながら、旧派の俳句が近世〈本草学〉レベルの認識に止まってしまったのは、坪内逍遥や大西祝が、生物学的認識を非文学的と排除したことに因るが、子規の新派は、生物学の自然美観なる議論を受け入れたがため、その分析的認識を俳句創作に導入することを得た、と論じている。さらに第三章では、〈改暦〉により生じた季節の狂いの問題を取り上げている。特にく新年〉と〈立春〉がずれた点が深刻で、子規も初め、太陽暦採用を文明の尺度どする風潮に促されるように、〈新年（冬)〉と〈立春〉を区別する考えに立つものの、その後、再び〈実感に基いた見直し〉を提唱することになる。それは、彼が常に帰納的に思考する人であったことと無関係ではない、と述べている。

以上のように、子規の〈俳句革新〉には、同時代の何らかの学問的背景が見え隠れしている訳だが、より本質的には、哲学に支えられていたと言ってよい。それ故第Ⅱ部では、明治期において諸学の根本と見做された哲学が、子規の文学観をいかに規制していくかという問題に論点を絞っていく。第一章では、そもそも心理の発達理論を検証する哲学上の関心に基く試みであった明治 20 年代の子規の句作集成「寒山落木」が、次第に句作研究（文学研究）にすりかわっていく過程を指摘している。そして、その後に書かれる俳論「我が俳句」に、句作の発達を顧みることで〈美の標準〉が見えるとあることからも確認可能なその過程は、偶然ではなく、井上円了・大西祝・元良勇次郎などの哲学を受容した結果見出されたものである、と論じている。また第二章では、子規の〈美の標準〉が、同時代に流布したハルトマン美学の如き形而上学的な概念ではなく、サリー心理学などに導かれ経験的に認識されたものであり、〈各自の「美の標準」〉なる矛盾した言い方も見られたため、内田魯庵の批判を招いてしまったと報告しながら、しかしその矛盾をそのまま貫いたからこそ〈俳句革新〉が現実のものとなった、と述べている。第三章では、子規の革新が〈写生句〉と〈景物句〉にわたったがために生じた季節感の矛盾問題をリードしていくのも同時代の哲学であった、と述べている。すなわち、〈写生句〉の〈盛り〉を重視する季節感が、即物的なものの方が連想が働きやすいとする元良勇次郎説に支えられたように、〈景物句〉の節気に基く季節感もまた、元良の概念はより高度な連想を生むとの説に支えられていたと言えるものの、その後この矛盾の止揚を願い、中庸ないし中道なる発想に帰着するに至るのも、儒学の影響もさることながら、元良や井上円了の主張に促された結果に他ならない、と説いている。

結章において、単に西欧自然観の受容に走るのではなく、伝統的自然認識の活性化をも志した正岡子規の〈俳句革新〉は、東西文化の対立の超克を意図したものに他ならず、同時代の哲学の促しによるところが大であったとしても、それは、紛れもなく子規文学の近代性を証すものであると論じ、結びとしている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

著者の目論見は、これまで別々に考察されてきた嫌いのある明治の文芸思潮と正岡子規の〈俳句革新〉を、いわば包括的に捉える視座を提出することにある。そのため本論文では、ともすれば非近代的文学者のように見做されてきた子規の試みの近代性を解明し、明治文芸思潮との接点を見出そうとした。すなわち著者は、これまでほとんど顧みられることのなかった、子規が自然科学と哲学に深く傾倒していた事実に着目し、それらが彼の文学形成に与えた影響の質を具体的に示している。例えば自然科学の受容に関しては、単に季語や季節感の問題を明瞭にしたばかりでなく、何よりも認識の変容を齎したことを、主に第Ⅰ部で論じているが、のみならず子規が残した資料と周辺資料を読み比べることによって、彼の革新が、新しい〈写生句〉の確立の他に、伝統的〈景物句〉の近代化をも目差すものであったことを明らかにしている。無論こうした子規の革新の方向性は、先行研究では全く指摘がなく、本論文の大きな成果である。そしてその成果は、『日

本近代文学』や自然科学系の雑誌『ビオストーリー』に掲載され、遍く知られることとなった。また、哲学についても、同時代の文芸思潮を支配したドイツ観念論の流れを汲む美学とは異質な、あくまで帰納的に物事を捉える体のものであったためこれまで無視されてきたが、子規の〈俳句革新〉の過程そのものが、大学時代に叩き込まれた哲学に導かれたものであったことを明らかにしている。具体的に言えば、同時代の代表的哲学者たる元良勇次郎・大西祝・井上円了らの著作や評論文が子規の文学的動向や思想をいかに支配していくかを、主に第Ⅱ部で丹念に跡付けていて、見事である。かくして、子規の〈俳句革新〉の歩みが、明治の近代文学者の文学革新のそれに他ならなかったことを論証し、その文業を近代文学史に位置付けることに成功している。そしてその成果は、近代作家、特に自然主義作家の文学革新に及ぼした自然科学や哲学の影響の深甚さについて再考を迫るものにもなっている。

なお、本論文は、自然科学や哲学は言うまでもなく、他に江戸期の俳諧文芸や儒学思想など、多くの隣接領域の知見によって論述が支えられている。その目配りの広さが本論文の魅力の一つであるのは疑いないが、他方で瑕瑾にもなっている。すなわち、そうした専門外の領域に対する認識や術語の理解が必ずしも充分でないため、論述に荒さの目立つ部分が見受けられる。さらに具体的な作品分析が少ないため、論述がやや観念的に見える部分もあり、今後の研究の進展を待ちたいが、ただしそれらは、本論文の価値を些かも低めるものではない。本論文が日本近代文学研究を新たな局面に導いた功績は極めて大きい。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。